温泉旅女姦

湯煙に散る姉妹華

島津六
挿絵／匿名ヒーロー

試し読み版

リアルドリーム文庫

Contents

目次

第一章　湯に咲く姉妹……4
第二章　冬山の車窓から……54
第三章　堕ちる若葉……108
第四章　散る花びら……166
第五章　生贄の雛たち……200
第六章　狂い咲く湯の華……235

登場人物 *Characters*

武藤 霞
(むとう かすみ)

女子大生。黒髪の似合う和風美人。押しに弱い性格で、押し切られると折れてしまいがち。妹と姉妹みずいらずで白花温泉へとやってくる。

武藤 綾
(むとう あや)

女子校生。姉と正反対で溌剌として強気な性格でもあり、好奇心も旺盛なため、様々なことに首を突っ込むくせがある。

島田 雷蔵
(しまだ らいぞう)

白花温泉のある旧白花村の村長。既に統廃合で村ではなくなっているが、白花の人々から村長と呼ばれている。華屋旅館を会員制の売春宿として売り込もうと画策する。

野分 穂花
(のわき ほのか)

華屋旅館の女将。父親の死後、入院中の母親と実家である温泉旅館の維持のために一人で奮戦する。生真面目すぎる性格ゆえに、島田の甘言に惑わされ、悪の道にのめりこんでしまっている。

第一章　湯に咲く姉妹

一

「お姉ちゃん、すごいよ！　私達しかいないんじゃない⁉」
「そうみたいね。ロッカーが全部空いているわね」
温泉旅館の広い脱衣所で、栗色のショートカットを揺らして、武藤綾（むとうあや）がはしゃいだ声を上げた。普段は気の強さを示すように目尻の切れ上がったアーモンド形の瞳が、今は喜びを混（た）えてきらきらと輝いている。嬉しさを出し惜しみしない彼女の様子に、姉である武藤霞（むとうかすみ）は柔らかな笑みで応える。華やかな造作の美少女である妹とは対照的に、姉は切れ長の眼に儚げに睫毛をけぶらせた涼しげな和風美人だった。
「もう、お姉ちゃんももっと喜んでよう！」
（確かにはしゃぎたくなる気持ちも分かるわ）
『白花温泉』が穴場の温泉があると聞いてはいたが、そもそも旅館に入ってからというもの、従業員以外の人間を見ていない。少なくとも今の女湯は彼女達の貸切状態で

ある。霞も内心ではその状況にうきうきしていたのだが、綾のように手放しで喜びを表現するのは苦手だった。こういう時は感情表現の豊かな妹が羨ましく思える。綾は既にカットソーを脱ぎ始めていた。

黒いキャミソールとレザーのホットパンツを身に着けた少女が、脱衣所の昼白色の照明に浮かび上がる。暗色でまとめられた衣服が長身の綾にはよく似合っていた。彼女はブラジャーは着けていないらしく、コットンの生地の盛り上がる頂点が小さく尖っているのが見てとれる。ホットパンツを脱ぎ去り、百七十センチある綾の身長に見合った長い脚から、内側に穿いた黒タイツが抜き去られれば、ほどよく筋肉の乗った美脚がむき出しになった。

「あ、替えのパンツ忘れちゃった」

そんなことを言いながら、キャミソールを脱ぐ。白い乳房と薄い桜色の小ぶりな乳首が現れた。霞は本人から八十五センチだと聞かされたが、身体が締まっているために相対的に大きく見えるバストは、若さを誇示するかのようにつんと張って上を向いている。見るからに柔らかそうな乳房と、薄く浮いた肋骨の下に見える僅かな腹筋の盛り上がりの対比が、姉である霞の眼にもセクシャルに映った。

綾は弾けるような張りを見せる若乳を揺らしながら、グレーとピンクのボーダー柄

のパンティを脱ぎ捨てる。なだらかに張ったヒップと、白い肌に映える黒々とした陰毛も露わに、彼女は一糸まとわぬ姿になった。部活のバレーボールで鍛えられた肉体は、きっちりと搾られながらも女性らしい柔らかな起伏を残しており、姉の眼から見ても実に魅力的だった。

「お姉ちゃんも早く！」

「あ、うん、そうね」

浴室へ続く扉を開けた綾はさっさと脱衣所から出て行った。残された霞は着ていたタートルネックのセーターに手をかける。本人は地味なデザインのつもりで買ったタイトな黒いセーターは、中に包まれた彼女の肉体の凹凸を余すところなく浮かび上がらせている。そのシルエットは霞の思惑とは裏腹に非常に肉感的なものだった。

（綾が喜んでるみたいでよかったわ）

表情にこそ出ないものの、内心でうきうきとしながら霞はセーターを脱ぐ。腰まで届く黒髪が、彼女の肌の上に流れ落ちる。細身ながらもむっちりした女体に、シンプルなデザインのブラジャーが食い込んでいる。ブラジャーを外すと、ぶるんと揺れて霞の乳房が左右に広がった。妹とは異なり、たっぷりとした重量感のある女肉の先端には、濃い桃色の乳首が咲いている。乳輪もまた妹よりも二回りは大きく、乳肉から

ぷくりと盛り上がっていた。
（もっと可愛いおっぱいだったらなあ……）
存在感の強い自分の乳首に溜息を吐きながらベルトを外す。タイトなブラックジーンズを下ろしてパンティ一枚の姿になった。下着のゴムがヒップに僅かに食い込んで肉の段差を作っている。霞はパンティをくるりと丸めるようにして脱ぎ捨てた。清楚なルックスとは対照的なまでに奔放に繁茂した恥毛が、生々しい女体の存在感をアピールする。豊かな黒髪は純白の背中で揺れはる躍り、メリハリの効いた肉置き豊かな彼女の肢体の魅力を引きたてる。

「こんなに豪華なんだ……」
浴室へと足を踏み入れた霞が小さく声を漏らす。板張りの浴室が天井からの採光に輝いている。湯口から注がれる源泉が観光気分を盛り上げる。霞の眼には、自宅であるマンションの味気ないＦＲＰの浴室とは比較にならぬほどに豪華で高尚な空間に映った。彼女は恐る恐るといった様子で、三十人は入れるであろう洗い場を進んでいく。
「ほら、お姉ちゃんも早く入ろうよ！　こんな広いお風呂初めてだよね！」
好奇心と興奮が隠せない様子で、綾は早速かけ湯を始めていた。ぴちぴちと張った

十代の美膚に弾かれて湯の滴が煌めいている。霞も重ねられた手桶の一つを手にして、浴槽の湯を身体にかける。腰を落とした彼女の肩から脇腹を伝わって湯が流れた。豊かな尻の谷間を走る温水が、乙女の陰毛へとたどり着き、ちょろちょろと音を立てて床の木目へと流れ落ちていく。

「待って、綾。私も入るから」

「早く早く」

綾の細い脚が浴槽を跨ぐ。品よく整った彼女の恥叢が浴槽の水面に反射していた。霞も湯の中へと足を差し入れた。

「なんかお湯の感触が家と違う！」

（本当になんだかツルツルしたお湯だわ）

アルカリ性の水質に新鮮な感動を覚えつつ、姉妹は並んで湯船へと身体を沈めた。思い切って身体を伸ばすと、爪先から腰椎を通ってアトラスに至るまで、体幹にじんわりと熱が入ってくるのを感じた。

「温泉ってすごいねえ……」

「そうね。来てよかったわね……」

囁きあった二人が湯船でぼんやりと眼を閉じる。
その時、浴室の入り口でがやがやと人の声がした。

二

（誰か入って来たのかしら？）
姿こそ見ていないものの、他の湯治客もいるはずだった。その誰かが浴室に入ってきたのだろう。ぺたりぺたりと足音が近づいてくる。
「や、お邪魔さん」
のんびりと声をかけながら入って来たのは二人の老人だった。白髪を五分刈りにした男と、酩酊したかの如く胸元から禿頭の先端までを朱に染めた、赤ら顔の男である。
（えっ、なんなの、この人たち！）
霞はすぐに目を逸らせたが、萎びたペニスが彼らの股間に揺れていた。いきなりの闖入者に唖然としている姉に寄り添うように綾が近づいてきた。
（お姉ちゃん、どういうことっ⁉）
（分からないわ……混浴とは書いてなかったけど……）

驚いた姉妹が囁き声を交わす。二人の老人は、おろおろとする姉と不安そうな妹を尻目に、さっさと掛け湯をして浴槽に入ってきた。
「かああ、やっぱりここのお湯が一番だな！」
「んだな。若返るべ！」
互いに六十年配と思しき老人が、くつろいだ様子で語り合っている。平然とした様子で女湯に入ってきた彼らを見ていると、驚く自分たちの方がおかしいのではないかという錯覚すら感じる。
（このお爺さんたち、勘違いして入ってきちゃったの⁉）
（でも、入り口には「女湯」って書かれてたし、隣にちゃんと男湯もあったわ）
（そしたらこのお爺さんたちは何なの⁉）
「お姉さんたちはどっから来たべさ。東京かね」
「え、あの……はい」
「都会者には退屈だべ！　こんな田舎は！」
小さく耳打ちし合っていた姉妹に老人たちが話しかける。裸の肉体を無遠慮に眺める彼らへの嫌悪感を押し殺して、霞は彼らに応じる。
「でもまあ、温泉は本物だからよ！　ゆっくり浸かっていくといいべさ」

老人斑の浮いた身体を近づけてくる男たちは姉妹を引き止めようとするかのように話を続ける。少しずつ彼らから逃げながら、霞は綾に目配せをした。姉の意を察した妹がさりげなく湯船の中を移動していく。そのまま端まで行って、さっさと逃げようという作戦だった。

「お姉さん方よ、袖振り合うも他生の縁だべ。ここは一つ背中を流してくれや」

「ええっ!?」

「そりゃあいい考えだべなあ」

姉妹の作戦を阻止するかのように強引な提案を持ちかける禿頭の老人の言葉に、五分刈りの老人が頷いてみせる。

（この人たち、本気で言っているの!?）

咄嗟に返答に詰まった霞を置き去りにして、二人の老人は話を進めてしまう。

「お姉さんたちもまだ身体を洗ってねえべ。なら丁度よかったべや」

「んだなあ。地元の人間との交流も旅の醍醐味だべさ」

さも気の利いたことを言った、という様子で二人の老人はにたにたと笑っていた。突然の展開に、姉妹は視線を交わし合う。

（どうするのお姉ちゃん！）

（仕方ないわ。少しだけこの人たちに話を合わせましょう）
思慮が先走ってしまう霞としては、下手な言動で二人の男の機嫌を損ねることへの恐れがあった。自分たちが素っ裸の状況で、男たちを刺激するような真似は避けたい。
「それ、そこのカゴに襦袢が入っとるがよ」
五分刈りの老人が浴室の隅に置かれたプラケースを差した。禿頭の老人はさっさと風呂から上がり、洗い場の椅子に腰掛けている。ケースと老人の間でおろおろと視線を彷徨わせる霞に、禿頭から指示が飛ぶ。
「ほれほれ、湯冷めしてしまうべさ！　早く頼むべや」
（そんなことを言われても！）
老人の間では既に彼女に背中を流させることが決定しているのだろう。急にイラつきを見せる禿頭の様子に、霞は覚悟を決める。妹になにかがあってからでは遅いのだ。
「あの、だったら少し向こうを向いていて下さい」
「こんな爺を相手になにを恥ずかしがってんだべ！」
「初心いべなあ！」
なにが可笑しいのかげらげらと笑う二人に、怒りよりも恐怖を覚える。こんな非常識な振る舞いをする人間を怒らせたらどうなるか分かったものではない。妹に目配せ

すると、背中を丸めた霞は、男たちの視線を避けながら浴槽を出る。
「おお！　すげえ尻だあ！」
「白くてすべすべだべなあ！」
（見るなって言ったじゃない！）
無意味な願いだとは思っていたが、こうもあからさまに好色な言動をするとも思っていなかった。霞はなるべく身体を小さくしたままでケースから襦袢を取り出す。
（浴衣みたいな感じなのね）
一枚布で作られた簡素な衣装だったが、裸でいるよりはマシに違いなかった。霞は手早くそれを身に着ける。濡れた身体にへばりつく化学繊維の感触が不快だった。

「あの、お待たせしました」
霞は腹をくくると、染みだらけの背中に向かう。彼女は気づいていないが、極薄の襦袢は彼女の濡れた肢体に張りつき、内包したその肉体のシルエットを顕現せしめていた。背中を向ける禿頭の老人からは見えないが、浴槽の中からこちらを窺う白髪の老人は霞の肉感的なボディを堪能しているらしく、好色そうな笑みを浮かべていた。
「ええと、洗うためのタオルとかヘチマとか……」

「そんなもんはないべよ。手のひらでこすってくれればえべや！」
尊大な態度を隠しもしない禿男が、下劣な要求を突きつける。しばし逡巡する霞だったが、壁際に並べられた石鹸を仕方なく手に取る。
「早くしてくれや。東京もんはのんびりしすぎだべ！」
（なんなのよこの人！　信じられないわ）
温厚な霞も、徐々に怒りを感じ始める。それでも平静を取り繕いつつカランをひねり、手のひらで石鹸を泡立てた。僅かに躊躇(ためら)いを見せながらも老人の背に手を伸ばす。
（別に変な場所を洗うわけじゃないし、石鹸越しだから大丈夫……）
自分に言い聞かせながら、泡まみれの手で禿男の背に触れる。泡の向こうから伝わる、ぐにゃりと弛んだ老人の皮膚の感触に鳥肌が立った。同時に彼女の乳首もぷくりと勃起して、浴槽の中で観察している五分刈り男の眼を愉しませる。美女は自分に注がれる視姦の眼差しなど知るよしもなく、たっぷりと魅脂を絡めた乳房をゆっさゆっさと揺らして洗浄奉仕に勤しむ。
「んっ！」
禿男が唸り声を上げて両手を上げた。腋の下を洗えと言う意味なのだろうか。奴隷を使う貴族の如き振る舞いに、怒りよりも呆れてしまう。

（この二人が異常か、地元の習慣かどっちなのかしら。時代錯誤も甚だしいわ）
ぽたぽたと水滴を落とす腋毛に嫌悪感が湧き上がる。だが、霞は一つ唾を飲み込むとゆっくりと両手を差し入れた。
（嫌な感触だわ。男の人ってこんなのが嬉しいの⁉）
男の体温を伝えるようにねっとりとした手触りの腋の下をすりすりとこする。指先に絡みつく腋毛の存在がひたすら不快だった。

「よおし、そろそろいいべさ」
「あ、はい……」
背中を泡だらけにした老人の満足そうな声に、霞は思わず安堵の溜息を漏らす。
「じゃあ、流しますね」
「いや、次は前だべえ」
そう言うと、禿男がくるりとバスチェアを回転させて霞と向き合った。いきなりの行動に目を背ける暇もなく、腰を落としていた美女は老人の男根と相対してしまう。
「……ひっ」
眼前に曝け出された醜悪な物体に、引き攣れたような声が漏れる。すぐに眼を逸ら

したが、不潔そうな白髪交じりの陰毛の中から垂れ下がった赤黒い肉棒と、干し柿のような皺だらけの亀頭が、霞の脳裏に焼きついた。
「なにを未通女ぶっとるべさ。そんなスケベな格好してからに！」
「えっ……きゃっ！」
老人の言葉で、自分の状態に気づいた霞は可愛らしく叫ぶと、両手で身体を隠した。濡れた身体と浴室内の湿気との相乗効果で、彼女の肉体を覆う襦袢はすっかり透けていたのだ。今となっては、生地の白い部分よりも透けて見える霞の肌の面積の方が広い始末である。たとえ霞がバストトップを隠したところで、胸元からウエストからヒップの丸みに至るまで、乙女の甘い肉体が晒されている事実に変化はなかった。
「待って……やだ、ちょっとそんな、じろじろ見ないで下さい！」
しどろもどろになりながらも、初心な女子大生は男たちの視線から身を隠すようにして背を丸めた。押しつぶされた乙女の肉が逃げ場を求めてむにゅむにゅとはみ出す様子を、二人の老人は蕩けそうな笑みで眺めていた。
「見るなと言われてもなあ？」
「そうだべな」
いつの間にか浴槽から上がった五分刈りの男が、ぽたぽたと滴を落としながら近づ

いてくる。二人の男に挟まれ、霞の中で不安と恐怖が大きく膨れ上がる。牝贄の乙女は震える肩を押さえながら男たちを見上げた。
「じゃあ、とりあえず脱いじまうべ」
「えっ⁉」
「んだなあ。そんなに濡れてちゃあ気持ち悪りぃべ！」
「何を言ってるんですか！　そんなことをするわけ……」
呆れた声を上げる霞の声は尻すぼみになる。世間知らずな彼女だったが、二人の老人たちの放つ空気が変化したことを悟ったのだ。薄笑いの眼の奥に剣呑な光を宿した五分刈りの老人が、背後から霞の肩に手を伸ばす。なだらかにカーブした女性的なラインに皺くちゃの指が食い込んだ。
「ちょっと⁉　やめて下さいっ！」
「まあそう言わんと！」
「だべなあ」
口調こそのんびりしたものだったが、背後の老人は霞が身に着けた襦袢を思い切り引っ張った。
「きゃあっ！」

無理やり肩をはだけられた乙女が悲鳴を上げた。濡れ光る鎖骨が露わになり、押さえて歪んだ胸の起伏がしっとりと淫靡な影を作る。乙女は必死で着衣を押さえるが、老人の膂力は意外なほどに強かった。

（このままじゃ本当に……！）

美女の濡れた身体に汗の珠が浮かび上がる。浴室の床に腰を落とした霞が力むと、襦袢の裾から覗くむっちりとした太腿がぷるぷると震えた。

「おっ？　おおっ？」

固く閉ざされた腿肉の奥で形を歪めた尻肉の湾曲を、禿頭の徳さんが覗き込んでいる。横座り気味に膝を曲げているために裸の股間はかろうじて隠されているものの、濡れて不安定な床の上ではいつ姿勢が崩れるか分かったものではなかった。

「ほれ、頑張らないとお乳がこぼれてしまうぞ！」

いやらしい笑みを浮かべながら、老人が弾みをつけて襦袢の襟を引っ張った。

「ひっ⁉」

ふっと身体が浮くような感覚に乙女は息を呑んだ。直後に彼女は尻を滑らせて、仰け反るように倒されてしまう。着衣の裾は濡れた下半身にかろうじて張りついているが、何とも頼りない状態だった。

「よおし、信さんよ、そのまま押さえてれ！」
「痛っ、なにするんですっ！」
信さんと呼ばれた五分刈りの老人は、美女の肩を掴んでしまった。このままでは羽交い締めにされると思った霞は、乳房を抱えていた両手で襦袢の裾を押さえた。その状態であれば腋の下から腕を抱えるのも難しい。だが、その行為は痴漢に別の行為のチャンスを与えただけであった。
「おっほ、乳豆をこんなにくりくりさせよって！」
「なっ⁉　やめっ、触らないでっ！」
薄衣の上から乳房を触られ、霞は悲鳴を上げる。濡れた布を一枚挟んでのペッティングは彼女にとって不快でしかなかった。湯に浸かっていたせいで皺が伸びたふにゃふにゃの指先から生温かい老人の体温が伝播する。乙女が両手で裾を押さえているために、中央に向かって寄せられた乳房は抜群に揉み易い位置にあったのだ。
「柔らかい娘っこの乳だあ！」
信さんは大喜びで両手を動かし始めた。湿った衣服がぬっちゃぬっちゃといやらしい音を立てる。霞は恥辱と怒りに視界が赤く染まるような感覚を味わっていた。
「やめてっ！　離れてっ！」

乳弄りをやめない男を振り解こうと身体を揺すれば、尻肉がぷるんぷるんと弾み、表面を覆っていた布切れをはね飛ばしてしまう。しっとりと汗ばんだ乙女の下半身は、対面する男を誘惑せしむるに十分な魅力を備えていた。

「うほぉ！　このケツも堪らねぇべさ！」

徳さんが、乙女の乳房を愉しむ信さんに対抗するかのように、男にとって邪魔な薄皮がつるりと剥かれた牝尻に手を回した。床に着いたことで肉の弛んだ尻たぶに、皺だらけの太い指が這い回る。破廉恥極まりない行為に、霞は怒声を上げた。

「やめてってば！　なにしてるのよっ！」

両脚を閉じつつ、男の手を振り払おうと下半身を揺さぶる。尻の動きに合わせて揺れる霞の黒髪から漂う乙女の芳香に、老人たちは笑み崩れる。

「よしよし、ほんなら失礼するべさ」

徳さんが禿頭を真っ赤に上気させて襦袢の裾を捲り上げていく。白い太腿はやがてそのつけ根近くまでを露わにした。男たちの視線が牝肌に突き刺さる。

「本当に駄目よっ！　やめてぇっ！」

乙女が必死の声を上げる。このままでは男たちの前に陰部を曝け出す羽目になってしまう。冷や汗に濡れた背中に豊かな髪を張りつけた美女の太腿の間に徳さんの手が

差し込まれた。濡れた牝肌の摩擦力を利用して、股間を目がけて老人の淫手がじりじりと滑り上がる。もちもちの姫膚に、痴漢はだらしなく表情を弛ませた。
「この太腿がまたすべすべだべなあ！」
（どうなってるのよ！　こんな……！）
内腿をずりずりと侵犯するおぞましい感触に鳥肌を立てつつ、両手で必死に禿男の淫手を食い止める。だが、信さん同様の腕力を見せる徳さんの指は、汗で濡れた股関節の窪みを撫でながら、ついに霞の秘部へと到達した。
「っ！」
自分の陰毛が男の指に弾かれた感覚がして、霞は背筋を凍らせる。更に、濡れた襦袢の生地と区別をつけぬままに、徳さんは彼女の陰阜を撫で始めた。
「おお？　今の感触は……」
「二人とも！　その辺でおふざけはやめてください！」
「えっ⁉」
突然の声と人の気配に、浴室にいた三人が動きを止める。
入り口を見れば、扉を背にした綾の姿と共に、不機嫌そうな顔の女将の姿があった。

（よかった……綾は間に合ってくれたのね）
自分が送った視線の意図に気づいた妹に、霞は心の底から安堵の溜息を吐いた。

三

武藤姉妹がこの温泉地へとやってきたのは、互いの進路決定を祝してのことだった。大学四年生の霞の就職内定と、綾の大学進学という祝い事が重なったので、姉妹水入らずの旅行をしようという流れになったのである。

十二月の長期休暇のタイミングに合わせて旅館の予約をとり、二両編成のローカル線に揺られて到着したのが、ここ白花温泉である。

（観光客が珍しいのかしら？　あんなにじろじろ見てくるなんて）

霞が最初に感じたのは、山間の地方ゆえの寒さよりも、自分たちに向けられた好奇の視線だった。改札に佇む駅員は利用者への感謝をせぬままに、霞と綾を舐めるように眺めていた。駅を出れば、まばらに並んだ土産物屋からも昏（くら）い視線が送られてくる。

不快感と共に湧き上がる違和感を押し殺して、霞は妹を町民たちの無遠慮な眼から隠すようにしながら旅館へと向かった。幸い、初めて訪れる土地への好奇心でいっぱ

いの綾は、霞のように陰湿な意識を向けられているとは感じなかったようだ。

やがて到着した旅館は、老舗然とした風格こそないものの、清潔感のある建物だった。伝統や格式を持ち出されてもいまいち判断の出来ない若い姉妹にとっては、こちらの方が気楽というものである。

「綺麗な建物だね！」

「そうね、新築みたいだわ」

眼を輝かせる妹の様子に、霞は内心で安堵の溜息を吐く。町の人々の雰囲気の悪さと同様に、宿にまで裏切られたらどうしようかと心配していたのだ。姉妹が入り口へと近づくと、中から戸が開く。

「……いらっしゃいませ」

現れたのは三十歳前後と思しき和装の女性だった。切り揃えられた前髪の下から覗く切れ長の眼が怜悧な印象を与える。しっとりとした白い膚に浮かぶ暗色の口紅が艶めかしく濡れ光っていた。肩まで届かない程度に切り揃えられたショートカットと、着物の襟の隙間からはちらちらと細い首筋が覗いている。クールな美貌と共に、熟し始めた牝の肉感的な香りを漂わせるアンバランスな魅力をもった女性だった。

「あ、こんにちわ」
「あの、予約していた武藤です」
一瞬、女性に眼を奪われていた姉妹だったが、慌てて挨拶を返す。女性は薄く笑みを浮かべてはいるものの、瞳の奥にどこか酷薄な光を宿しているように思えた。
「『華屋旅館』へようこそ。女将の野分穂花（のわきほのか）です。どうぞお入り下さい」
彼女は慇懃な物腰で姉妹を宿へと招じ入れた。外観と同様に清潔感のある内装に、姉妹は揃って笑みを浮かべる。
「お姉ちゃん、中もすっごくきれい！」
「ここにしてよかったわね」
「……ありがとうございます。お部屋へご案内しましょう」
従業員に荷物を預けた二人は、女将に案内されて宿の奥へと進んでいく。木造建築の香りのする建物は採光も優れており、十二月の日差しにも暖かさが感じられる。
「わ、広い部屋！」
部屋に入り、霞が女将から説明を受けている間も、綾はぱたぱたと動き回ってしきりに感嘆の声を漏らしていた。最初は落ち着きのない妹を窘めていた霞だったが、す

ぐにそわそわとし始める綾の様子に無駄な行為だと悟っていた。
（でも、それだけ喜んでくれているのよね）

「……ではごゆっくりなさって下さい。お夕食の時にまた伺います」
そう言って女将が部屋を出ていく。綾はさっそくタオルや浴衣の準備を始めている。夕飯の前に一風呂浴びるつもりらしい。
「もうお風呂入るの？」
「当たり前でしょ！　いま入って汗を流して、寝る前にもう一回入るのよ」
温泉が楽しみで仕方ないといった様子の妹はさっさと準備を終えて部屋を出ていった。彼女に続いて霞も準備を整え、浴場へと向かう。その廊下で霞はふと気づいた。電車を降りて町に入ってからずっとつきまとっていた違和感の正体である。
（……野分さん以外に女性が全然いなかったわ）

四

「……完全に私どもの落ち度でございます。管理が行き届かずご迷惑をおかけしまし

た。大変申し訳ありません」
そう言うと女将は深々と頭を下げた。濡れたように艶のある黒髪が揺れている。
浴室から出た霞と綾は自室に戻っていた。姉妹が身づくろいをするのを待ったかのようなタイミングで、穂花が二人の部屋に現れ、謝罪を始めたのである。
「ご迷惑をおかけした分の料金はサービスさせていただきます。ご入浴中に地元の者が侵入するような事態にも十分に配慮を致します」
丁寧な口調だったが、底光りのする淑女の瞳が霞の鼻面にぴたりと当てられている。女将の静謐な迫力に押されるように、女子大生は頷いてしまう。
「わ、分かりました。きちんと対応して貰えるならば結構です」
「寛大なお言葉、感謝いたします」
穂花は薄く笑みを浮かべて立ち上がる。だが、霞の胸の奥には奇妙な不安感が生まれていた。黒雲の如き胸騒ぎを心の底に閉じ込めて、無理やり作った笑みを妹へと向ける。
「もう忘れちゃいましょう、綾」
「……お姉ちゃんがそう言うなら」

都会から遠く離れた山地を夜陰が覆い始めていた。

夕飯を終えた姉妹は、室内でのんびりとくつろいでいる。旅館からは、通常の夕食とは別にサービスのデザートが提供されており、二人はいささか食べ過ぎていたのだ。

「まあ、このくらいサービスしてくれなきゃ困るわよね！」

「そうね。あんなにケーキを食べたの久しぶりだわ」

本来ならば、乙女の肉体に替えられるものなどありはしないのだが、人の善い姉妹はすっかり気をよくしていた。何もせずに、畳の上でごろごろとして、取りとめのない会話を交わす。満腹感に熱をもった肢体に冬の夜気が染み込むのが心地よかった。

（あのケーキ、ちょっとお酒が強かった気がするわ……）

身体の奥がとろんと温かく溶けていくような感覚がある。だが、ぼんやりとした時間を過ごす二人の空間に、ノックの音が響いた。

「あれ、お姉ちゃん、誰か来たね」

「そろそろ布団の準備かしら？」

果たして綾がドアを開くと、二人の従業員が立っていた。福々しい様相の六十がら

みの男と、それよりもやや年上に見える角ばった輪郭の男の二人組みである。どちらも人の好さそうな笑みを浮かべている。
「失礼します。お床の準備に伺いました」
「入ってもよろしいですか？」
布団の上でごろごろするのもいいかも知れない、と思った姉妹は二人の男を部屋へと入れた。彼らは慣れた手つきで準備を始めた。二組の敷布団を敷き、枕を置くと老人たちは姉妹に笑顔を向ける。
「では、当旅館の目玉でもある快眠マッサージをさせていただきますので、こちらへうつ伏せになっていただけますか」
（そういえば、紹介記事でも読んだような……）
プロによる本格的指圧が、旅館の売りの一つとして紹介されていた気がする。霞がぼんやりとそんなことを思い出していると、綾はさっさと布団に寝そべってしまった。
「じゃあお願いしまあす。ほら、お姉ちゃんもしてもらいなよ」
「……そうね」
食べ過ぎた夕食を消化するために血流が脳まで回っていないのだろうか。僅かにぼんやりとする頭のまま、霞は布団に身を横たえた。

浴衣の上から背中をぐいと押される感覚があった。本格的なマッサージとは異なり、痛みはまるでなかった。じんわりと肉体が熱を帯びていくのを感じる。

（ああ、気持ちいいわね……）

やはり旅行ということで神経が張り詰めていたのだろうか。老人の太い指で指圧を施されると、むず痒いような快感が生まれた。角ばった顔の男は、霞のツボを掘り起こすように、優しく強く指先を沈めている。

鎖骨に始まり、肩甲骨から背骨に沿って、男の指が腰へと下っていく。さすがに尻を触るようなことはせず、太腿へとジャンプする。むっちりと魅脂を乗せた霞の大腿二頭筋が薄い木綿の生地の下で柔らかく歪んだ。媚肉に包まれたむちむちの美脚に老人が指圧を施せば、滑らかな皮膚に少しずつ汗の輝きが生まれ始めた。

（血行がよくなっているのかしら？　身体が熱いような不思議な感覚ね）

男の指先は浴衣の裾から下降し、ぷるりと蕩けそうな脹脛を揉み解すと、折れそうに細く締まった足首を攻略にかかる。乙女の生肌の上を老人の指が這った後には、仄かに紅い痕跡が残された。やがて霞の下半身全体がじっとりと熱を帯びていく。

（これ、なんだか駄目になりそうだわ）

エラ張りの老人の指に身を任せながら、女子大生はいつしか眼を閉じていた。

妹の綾もまた、老人の指技に翻弄されていた。

姉よりも筋肉のついたスレンダーな肉体の上で浴衣の生地が頼りなく伸びている。ぺらぺらの布の上から、綾の大菱形筋を一筋ずつ解すようにして福々しい丸顔の老人の指がなぞっていく。自分では触れ難い大円筋を脇の下へ向けて指圧されると、女子校生の口からは満足げな吐息が漏れた。

（すごい、こんなに筋肉をマッサージされたのって初めてかも……）

運動部員としてそれなりにマッサージの経験はあるが、老人の指は彼女の内側にまで潜り込むように刺激を与えてくる。彼が僧帽筋を一突きするたびに、綾は身体を反らせ汗ばんだ白い咽喉から熱い息をこぼしてしまう。背中だけでなく、脇腹から腰へと至る優美な曲線にも男の手が押し当てられる。

（くすぐったいけど気持ちいいわ）

僅かに内臓が動くような感覚があり、体内の温度が上昇するのを感じる。代謝に優れた綾の肉体は、上半身への刺激を受けてあっという間に汗みずくになった。さらりとした乙女の汗を浴衣の生地が吸収すれば、薄い木綿はぴたりと彼女の皮膚に張りつ

いた。白い布団の上に、美しいS字を描いた女子校生のボディラインが浮かび上がる。
（なんだかぽかぽかして……私……）
丸っこい顔の老人の指が乙女の上半身を完全に弛緩させる。彼の指が下半身へと移動する頃には、綾は小さく寝息を立てていた。
「……」
老人たちが視線を交わした。えびす顔の老人が、着ていた法被の懐から三センチほどの大きさの円錐状の物体と、平たい金属のケースを取り出す。彼はケースを開くと、うつ伏せで眠る霞と綾の顔の間に置いた。更にその上に円錐を載せる。一方の四角い顔の老人はライターを取り出し、床の上の金属ケースに載った円錐の頂点に着火した。
「……」
エラ張りの老人が小さく頷くと、円錐の先端から細く煙が昇り始めた。同時に甘い香りが漂う。枯れ草のような臭いを僅かに感じさせるその匂いの元は、コーンタイプと呼ばれる円錐状の香だった。香りが拡散し始めて数分のうちに、霞と綾の寝息が深く遅くなっていく。強い誘眠作用のある香が、その性能を発揮しているのだ。
彼女たちの睡眠状態をじっくりと確認した二人は布団の上から立ち上がる。エラ張り男の方が服を脱ぎ始め、丸顔男は部屋の入り口へと向かった。彼がドアを静かに開

くと、外にはムービーを携えた男が立っていた。
四十代後半と思しき彼は、ムービーを覗きながらゆっくりと室内へと入ってくる。老人たちと一言も言葉を交わしていないが、互いのすべきことを完璧に把握している振る舞いだった。ムービー男は姉妹を同時にカメラに収められる位置へと移動し、撮影を始める。老人たちが、部屋の光源と彼の立ち位置を考慮して布団を敷いたのは明らかだった。中年男が撮影の最終準備を整える間に、丸顔老人も服を脱いでしまった。
ムービー男が老人たちに向けて指で○を作る。小さく頷いた二人の老人は、萎びた陰茎を揺らしながら、横たわる美人姉妹へと近づいていった。

五

老人二人が霞の浴衣を軽く掴むと、その身体の下に手を差し入れる。二人で呼吸を合わせると、一瞬で彼女の身体を仰向けにひっくり返した。僅かに霞の寝息のテンポが変わったが、すぐに元通りの深い呼吸音へと戻る。様子とタイミングを見計らうように動きを止めた老人たちはしばしのブレイクを経て、次に綾の身体に手をかけた。
再び、阿吽の呼吸でもって美少女の身体を半回転させる。手馴れた二人は汗一つか

いていない。綾の呼吸が落ち着くのを待った老人たちは、マッサージした時と同じ相手を膝立ちで跨いだ。

四角顔老人のごつごつとした指が霞の帯にかけられる。脇に作られた結び玉がしゅるりと解かれた。老人は霞の身体から帯を抜き取ると、浴衣の合わせをゆっくりと広げる。首筋から鎖骨に至る白い肌が徐々に開かれ、やがて肋骨が薄く浮いた胸元が露わになる。ノーブラの胸の谷間には滑らかな陰影が作られていた。

浴衣の間から乙女のヘソが現れる。つい先ほどまで指圧で発汗していたためか、彼女の中心に設けられた肉穴は湿り気を帯びて薄く光を反射していた。そして滑らかな下腹部が露わになり、霞の穿いた薄いブルーのパンティが室内灯に照らし出される。コットンの下着もまたしっとりと湿り気を含んでおり、女子大生の股間にぴたりと張りついている。いまや霞の肉体は正中線に沿って経て一文字に肌を晒していた。その光景を間近にして、老人の萎びていた肉茎がゆっくりと力を取り戻し始めている。

「……」

エラの張った顎に微かに力を込め、そっと浴衣を摘まみ霞の身体から払い除けると、どっしりと左右に垂れた乳房が露わになる。若々しい水気に溢れながらも、牝の媚脂

をむっちりと蓄えた彼女の乳肉が呼吸に合わせてふるふると揺れている。台地の如く乳肌から盛り上がった乳輪の中央に鎮座する乳首も、汗をまとって光っていた。

「……っ」

誰ともなく唾を飲み込む音が響いた。黒髪の清楚な美女が隠していた、男性の欲望を揺さぶる性腺刺激ボディに、男たちは興奮を隠せない。ムービー男はズームした霞の乳房を右から左へと舐めるように撮影した。

エラ男が太い人差し指を口に含む。枯れた臭気の漂う老人の唾液をまとったその指を、霞の右の乳首へと近づける。唾液が滴となって落ちる寸前で、彼の不埒な指先は美女の垂れ巨乳へと接触を遂げた。

にちゃっと小さく音がして、霞の乳首に老人の唾液が移植された。エラ張り男はそのままデリケートな器官の上で「の」の字を描くように人差し指を回転させた。凹凸の少ない巨乳輪の表面で、乙女の汗と老人の唾液とが混じりあう。

やがて唾液が少しずつ冷え始めると、霞の乳首も気化熱により僅かに体感温度を下げる。その刺激により、女子大生の乳首がむりむりと隆起し始めた。つけ根で畳まれていた乳首皺を広げるようにして、乳輪のサイズに見合った親指大の乳首がそそり立つ。そして、乙女が右側の乳首のみ変容させた姿は、中年男の手で余すところなくム

ービーのＨＤＤに記録された。
次に四角顔は霞の左の乳房をターゲットに捉える。老人は頬骨の盛り上がる顔を、眠れる女子大生へと近づけた。大きく胡坐をかいた彼の鼻がぷくりと膨らみ、美女の体臭を思い切り吸い込む。汗の塩気を微かに含んだ、熟した果実の如き濃密な甘薫が老人の鼻腔から肺腑へと浸透していく。若い牝の精気を取り込んだ老人は、むくむくとペニスを勃起させた。
「むぅ……」
興奮を抑えるような重い吐息が老人の口から漏れた。彼は焦げ茶色の唇を開くと、暗赤色の舌をだらりと伸ばした。毒キノコのようなぬめりを帯びた彼の舌が、求愛するナメクジのように、霞の乳輪にべちょりと接触する。そのまま濃い桃色の肉円盤をねっとりと舐めあげていった。乙女の乳輪に汚らしい粘液の跡が光る。老人はたっぷり一分ほど女子大生の乳輪の舐め心地を確認すると、最後に奥ゆかしく縮こまった乳首に舌を乗せた。舌の裏側で溶かすように舐ったかと思えば、固く尖らせた先端部分で乳首の生え際をほじり返す。
「あっ……っふぅ……」
睡眠状態でも性感は活きているらしく、老人の舌愛撫に応えるかのように霞は小さ

な吐息を漏らした。濡れた吐息が漏れると同時に、下劣な舌愛撫を受けた乙女の乳首はその魅芯を赤々と充血させながらぷりっと勃起を遂げる。左右へ広がった魚眼乳房の先端で巨大な乳首が突き出した様は、まるで興奮したカタツムリのようだった。

「んふぅ……はぁ……」

乳首の変容と共に美女の吐息が艶めかしく変化する。日本人形の如き硬質な白さを湛えていた彼女の頬には、いつしか官能の朱が差していた。霞のその変化を見て自分の成果に満足したのか、老人が身体を退ける。ムービー男は彼と入れ替わるようにして霞を跨いで立つと、彼女の上半身の撮影を開始した。滑らかに汗を浮かせた首筋から、老人の唾液に濡れ光る乳首の様子までもが４Ｋ映像としてきっちりと録画されていく。霞の乳房の情報を収録したムービー男は、丸顔の老人に合図を送った。

「……」

出番となった彼は四角顔と同じような手際のよさで、綾の浴衣を剥いていく。すると帯が解かれ、着物の前がはだけられる。姉よりも小ぶりであるがゆえに、左右に垂れずに上方を指して隆起した綾の乳房は、白磁の膚に色濃い影を落としていた。福々しいえびす顔を微塵も崩さず、老人は乙女の乳房を隠す木綿の生地を取り除いた。

たっぷりと肉感的な姉のバストとは質を異にした、生硬さと共に瑞々しさを備えた

陶器の如く儚げな乳房が露わになる。既に汗が引いた彼女の肉体は、さらりと涼しげに息づいていた。小さなイボを生やした乳輪の様子がカメラに収められる。

腹筋が薄く陰影を作る腹部が浴衣の内側から現れ、コットンのパンティまでもが室内灯の下に曝け出される。ムービー男は若鮎の如きその身を横たえた美少女のすべてを映像データへと変換した。

角顔老人は己の唾液をもってして乳愛撫を行なったが、丸顔老人は懐から小さなボトルを取り出した。手早くキャップを開け、ボトルを逆さにする。

とろり、と微かに白みを帯びたローションがボトルから老人の指に滴り落ちる。粘度の高いその液体を指の腹でこすると、ねばねばと広範囲に伸びていく。丸顔男の手はあっという間にローションまみれになってしまう。てらてらと妖しく濡れ光るその手が、むき出しにされた綾の乳房へと伸ばされた。

べちょりと小さく濡れた音を立てると、老人は手のひら全体で綾の乳房を左右それぞれ覆ってしまう。肌理（きめ）の細かい乙女の皮膚は、吸いつくような感触で男の淫手に密着した。張りつめた滑らかな皮膚の中で、僅かな硬さを感じさせる乳首の存在を愉しむように手のひらを動かして、男は粘液を塗り広げていく。ぼんやりと白く灯りを反

射していた美少女の乳房が、老人の淫戯によってぎらぎらと濡れ光り始めた。
「あふぅ……くぅ……」
寝息が僅かに乱れて、綾の細い顎が悩ましげに左右に揺れた。丸顔の老人は彼女の様子を見て、乳房への刺激を抑える。だが、乳辱の動きを止めることはせず、静かに乙女の乳肉を揉み続けていた。
「はぁっ、ふぅ……」
呼吸を浅くする美少女の閉ざされた瞼が桃色に染まっていく。すらりと伸びた首筋に血色が鮮やかに浮かび上がる。笑い皺の奥に光る瞳孔で綾の様子を観察しつつ、老人は彼女の乳房を揉み転がし始めた。
にちゃにちゃと小さく水音を立てながら、姉と比較すれば可愛らしいサイズの乳房が捏ね回される。ローションによって増幅された刺激が、乙女の乳首を官能に震えさせる。薄桃色だったニプルが徐々に朱に染まりゆくと共に、乳輪を彩る微細なイボたちがぷりぷりと屹立していく。更にその媚突起を老人の指先がほじくれば、中央に配置された処女乳首がぷっくりと屹立する。
彼女の唇より僅かに鮮やかな血色を魅せる初々しい勃起乳首は、粘液によってぬらりと光り輝いている。一センチ足らずの小ぶりな肉粒の先端ではY字形の刻印が、外

気に触れて微かに開閉していた。皮膚とは異なる僅かなザラつきを感じさせる綾の可憐な乳突起は、老人の指先にくすぐられると、いやいやをするように震えるのだった。
「んっふぅ……はぁ」
乙女の腹部が焦れたように波打ち、男の手の中で彼女の乳房がふるりと揺れる。自己主張を始めた肢体を宥めるかのように、えびす男は指の腹で乳首を扱き始めた。小指の先ほどの大きさに膨満した、粘液まみれの乳豆が、老人の指でねちょねちょと愛撫を施される。均等に刺激を施された両乳首は、天を向いて固くしこり立った。
「あっは、ふぅん……」
淫夢に苛まれるかのように、綾が切なげに首を振る。老人は指先の動きを速くしていく。ローションがはねる音がぴちゃぴちゃと響くと共に、乙女が腰をくねくねと揺らし始めた。垂れた頬を揺らしながら、老人は綾の肉体に淫悦を刻んでいく。
「はぁっ……んふぅん……っふぅっ、はぁぁっ」
美少女の寝息が一瞬高まった。同時に彼女の腰が小さく痙攣する。男の手に囚われた裸の胸が大きく振動した。
「うふぅん……」
そして彼女の呼吸が安定すると同時に、パンティの底部に小さな濡れ染みが出来た。

ローション愛撫で肉悦を覚えた綾のこぼす牝蜜によるものである。

美少女の儚い絶頂に満足した丸顔の老人が、カメラマンに小さく目くばせを送る。最後に霞と綾の肉体を舐めるように撮影し、ムービー男は撮影を完了した。影撮を終えた男たちは、音も立てずに片づけを始める。綾のローションを拭い、姉妹たちに浴衣を着せ、布団をかけてやる。持ってきた香炉を片づけ、蛍光灯を消す。

後に残ったのは安らかな寝息を立てる二人の姉妹のみだった。

六

姉妹の部屋を老人たちが去ってから数時間が経過した。既に日付は変わっている。

「ん……？」

暗い部屋で綾は目を覚ました。しばらく視線を彷徨わせて、月明かりの照らす室内の様子から自分のおかれた状況を理解する。

（そういえば、旅館だった……でもいつの間に布団に入ったんだっけ？）

マッサージをされてうとうととしたことは薄らと覚えていた。隣を見れば、霞が静

かに布団の胸を上下させている。綾は、世話焼きの姉が自分を布団に入れてくれたのだろうと結論づける。

（少しお姉ちゃんの汗の臭いがするわ……それにしても、私もいっぱい汗かいたみたいだわ。浴衣がちょっと湿ってるし）

もともと運動を続けており代謝のよい彼女は、かなりの汗っかきでもあった。発汗に気づくと、同時に咽喉の渇きも覚える。

（ちょっとジュースでも買いに行って、ついでにちょっと探検してみようかな？）

活発でもありかなり無鉄砲でもある綾は、自分の思いつきにわくわくしながら部屋を出て行った。

廊下に出ると、ぽつりと灯された照明が夜の暗さを逆に引き立てている。少しばかり恐怖を感じた綾は、足早にロビーへと向かった。

さすがにロビーは明るく、暗闇への恐怖を感じるようなことはなかった。ソファに腰を下ろした綾は、自販機で買ったスポーツドリンクを口に含む。

（本当に全然人気（ひとけ）がないけど、この旅館って大丈夫なのかしら？　結構お金もかかってそうなのに……）

そんなことを考えていると、今度は逆に人のいない広い空間が怖く思えてくる。綾はドリンクを飲み干すと、ソファから立ち上がった。

「？」

どこからか不思議な物音が聞こえた気がして、長身の少女は足を止めた。

「声かな？」

その音は、綾たちの部屋のあるフロアとは別の場所から途切れ途切れに聞こえてくる。再び探究心に火が点いた綾は、音のする方へと足を向けた。暗い廊下を進むと、はっきりと泣き声めいた響きが耳に届く。

（ここは客室じゃないわね）

客室にはドアが取りつけられているが、綾がいるフロアには障子が並んでいる。そのうちの一つから明かりが一筋漏れていた。

（きっとあそこだわ）

綾はゆっくりと足を滑らせると、障子の隙間に目を当てた。

障子の向こうは布団の敷かれた和室だった。

布団の上では浴衣の男と、女将の野分穂花が向き合っている。

穂花は膝を立てて座っており、濃紺の着物の裾から白い脛を露わにしていた。対面の男は左手で穂花の足を押さえながら、右手を彼女の両脚の間へと差し入れていた。何をしているのか綾の位置からは見えないが、健全な行為とはとても思えなかった。

「あっふ……んんっ！」

小さく動く男の手に合わせて女将が小さく声を漏らしている。耳をすますと、機械的な音とぴちゃぴちゃと湿った音が微かに聞こえてきた。

（もしかして、バイブ⁉）

男っ気のない生活をしている綾でも、さすがにその手の玩具の知識はあった。果たして男が右手を引き出せば、紫色をした派手なバイブがその手に握られていた。

「ふぅっん、お客様……」

玩具を取り除かれた女将は切なげに眼を伏せると、片手で裾を直す。どうやら相手は宿の客らしい。頭頂部をてらてらと光らせているが、綾には後頭部しか見えない。彼が無造作に放り出したバイブはねっとりと濡れて、ところどころに白濁した小さな泡が付着している。生々しいそのディテールに、女子校生は思わず頬を染める。

「そちらの準備もさせていただきますね」

女将は薄らと笑みを浮かべると、胡坐をかいた男の膝に左手を乗せた。そのまま右

手を彼の股間にもっていく。
（あれって、オチンチンを弄ってるの!?）
綾の想像は半分当たっていた。穂花は右手を使ってトランクスからペニスを露出させていたのだ。女学生の位置からペニスは見えなかったが、女将が薄毛男の股間に向けて顔を寄せていったことから、彼女がしようとしている行為が理解できた。
（まさか、フェラチオってやつ!?）
オーラルセックスについては、ハイティーン向けの雑誌の際どい記事で知っていた。だが、まさか現実でそんな行為にお目にかかるとは思っていなかった。鼓動と呼吸が加速し続ける綾の眼前で、女将はゆっくりとその怜悧な美貌を上下させ始めた。首筋にかかる彼女の黒髪がさらさらと揺れていた。
「ちゅっ……如何（いかが）でしょうか……？」
「おお、いいよ！　上手だ！」
声の具合からすると五十代くらいだろうか。美人女将の問いかけに、男は上ずった声で答える。その反応に満足したように、穂花は奉仕を続けた。上下に動くだけでなく、小首を傾げるようにして動きに角度を入れている。上目遣いにされた切れ長の瞳が、男を射貫くようにして光っていた。

「ご立派なお道具でらっしゃいます……ちゅるっ」
和装の美女はしっとりと湿った声で禿男の自尊心をくすぐっている。彼女の動きに合わせて、唾液が立てるはしたない水音が響いていた。四つん這いに近い姿勢で客に奉仕する女将は尻を掲げており、和服に彼女のヒップラインがつるりと浮かび上がっている。彼女の尺八に合わせて扇情的に揺れるその魅肉は、男の劣情を煽るのだった。
（あんな風にいやらしく動くなんて……）
清廉な女学生は、くねくねと肢体を波打たせて男に口唇愛撫を施す穂花に嫌悪感めいた思いを抱く。しかし、その露骨な性奉仕の姿に昏い興奮を覚えているのも確かだった。綾の腰もまた、女将の頭部に合わせて僅かにグラインドし始めていた。
「……このままお口に出されますか？　それとも挿入なさいますか？」
「うん、僕ももう齢だしね。二回目が出来るか不安だから挿入させてもらうよ」
「かしこまりました。体位は如何されますか？」
「ううん……バックでいただこうかな」
（えっ、本当にしちゃうの!?）
女将と客というだけで、赤の他人である二人が性交渉を行おうとしているという展開に、綾は驚きを隠せない。男とつき合ったこともない十代の少女にとって、セック

スとは恋人同士が愛を交わすための行為という認識しかなかった。
しかし、爛れた大人の男女は乙女の驚愕など知るよしもなく、布団の上で身を合わせようとしていた。女将が獣の姿勢をとり、男に尻をむける。薄毛男は立ち上がると浴衣の中に手を入れてトランクスを脱いだ。
「……っ」
男が穂花の着物をめくり上げた。それを見ていた綾はゴクリと唾を飲み込んだ。女将は下着を穿いておらず、女学生の位置からは穂花の尻が丸見えだったのだ。
「おほっ！　これはいい眺めだね！」
禿げかけの男は腰を屈めて、むき出しになった美人女将の股間を覗き込んだ。むっちりと白く媚脂をまとった新雪の如き白尻の間に、三十路女の熟れた肛門が息づいている。尻肌とは対照的に、微かにくすんだ色合いの会陰にはちょろちょろと下叢が繁っており、淫猥な印象を与える。秘部は濃い陰影に隠されているが、むちむちと外に飛び出したシルエットが微かに確認できた。
「喜んでいただけて恐縮ですわ」
そう言いながら、女将は客の男に下半身を捧げるべく大きく膝を開いた。べっとりと濡れた陰部が曝け出される。外陰唇が開き、ピンクの牝粘膜が濡れ光っている。

（あんなになるんだ！）
初めて見るセックスの準備を整えた他人の女性器に驚愕する。綾が自分で性器を開いてみた時とは異なる、挿入待ちのためにラヴィアが開口した状態である。穂花の牝花の頂点に咲いた、大きく発達したクリトリスも綾には未経験の存在だった。そして、同性である綾の驚愕は、異性である薄毛男にとっては興奮する素材となる。
「初めて見た時から想像していたが、まさかこんなにエロい身体だったとは！」
嬉しそうな声を上げて、禿人間が女将へとにじり寄る。彼は腰を揺らすと牝肉とジョイントするための位置を模索する。
「あっ、お客様のお道具……熱くなってらっしゃいます」
男性器が自分の花弁をかすめると、穂花が桃色に染まった言葉を吐く。性に濡れた女将の言葉に煽られたかのように、薄毛男は慌てて肉棒を彼女に向けて固定した。
「ここかな、行くよ」
「はい、いらして下さい」
女将の言葉の終わらぬうちに、客は彼女の秘唇を割って肉竿を潜り込ませた。泥をかき混ぜるかのような気泡混じりの挿入音が綾の耳朶を貫く。
「ああっ！」

「……！」
女将が高く声を上げた。綾は興奮と驚愕に荒くなる息を抑えるように、自分の口を手で塞いだ。背後からでは肝心の結合部が見えないが、処女である彼女にも穂花の女陰に男根が挿入されたのがはっきりと分かった。
「おおっ、これは素晴らしい！」
荒い息を吐きながら、男が感嘆の声を漏らした。三十路女の牝肉を堪能するかのように、彼はじっくりと腰をグラインドさせる。
「あふぅっ……お客様、ご立派でらっしゃいます……私、膣内が熱くて……」
女将もまた熱い息を漏らしながら、挿入者に労いの言葉を告げる。彼女は自分からは腰を使わず、客の動くに任せていた。
（あんな風に腰を動かすの……!?）
綾は声を上げそうになるのを堪えて奥歯を噛み締めた。アダルトビデオも観たことのない彼女にとって、初めてのセックス鑑賞である。乙女は禿男の腰打ちに合わせるように微かにヒップをくねらせていた。
「そろそろあんたも動いてくれるか」
しばらく腰を使った男は、突かれるがままでいた女将に声をかける。彼女が客を気

遣っていたのに気づいたのだ。
「恐れ入ります。では失礼しますね」
そう言うと、女将は四つん這いのまま膝と腰を使って、雄への肉奉仕を始めた。肉棒を翻弄するかのように上下左右にヒップが揺れ、飛び散った牝蜜が布団に小さく染みを作る。男の動きを察知しているかのように、ペニスが抜けるギリギリの位置まで腰を離したかと思えば、ぱちんと大きく音がするほどの勢いでヒップを押しつける。むちむちと肉に包まれた彼女の尻は、男の腰と接触すると派手な音を立てて汗の飛沫を飛び散らせた。女将の白い脚に、性汁の流れが幾筋も光っている。
(セックスってこんなに派手なものだったの!?)
挿入音に加えて、息遣いと喘ぎ声の混じりあうステレオサウンドが綾の鼓膜を震わせる。更に、大きく飛び散った様々な液体が発する酸味を帯びた生臭い性臭が美少女の鼻腔を刺激する。ねっとりと淫靡な質感を放つその行為は、綾が読んだことのある少女マンガで描かれていたさらりとしたセックスとはまるで別物であった。
(私もお姉ちゃんも、いつかあんなことをするのかしら)
自分のことは想像出来なかったが、霞が男に抱かれているシーンを思い浮かべると、綾は自分の奥が熱くうねり始めるのを感じた。微かに陰部が開いている実感がある。

このままでは下着を汚してしまうかも知れないと彼女が焦り始めた頃だった。
「おうっ！　そろそろ……駄目かも分からん！」
「ああんっ！　そのまま、出していただいて結構ですっ！　はぁんっ！」
切羽詰まったような声を上げた男が乱暴に腰を振り始めた。べちゃべちゃと濡れた音を上げて、男女の肉がぶつかり合う。女将は布団に突いた両の手足を発条（ばね）のように弾ませて薄毛男の肉突を受け止めている。
（出してって、精子のこと⁉）
セックスの完了を告げる言葉に、綾は胸が苦しくなるような思いだった。あの怜悧で潔癖な雰囲気をまとっていた女将が、汗と体液にまみれて男の精を受け容れるという現実が綾に衝撃を与えている。だが、肉悦を交わし合う男女は、性に未熟な彼女の理解が追いつくのを待ってはくれなかった。
「ううっ！　出るっ！」
「くふぅっ！　いらして下さいっ！　ああっ！」
雄と雌が互いに叫ぶ。同時に男の背筋が突っ張ったように伸ばされた。穂花の長い脚がびくんと痙攣する。
「あはぁっ……熱い精液が……っくふぅ……」

一拍おいて、穂花が湿った声を漏らした。彼女は両手足を震わせながらも、四つん這いの姿勢を維持している。先にダウンしたのは男の方だった。
「ああ……凄かった……」
そう言いながら、尻餅をつくようにして布団に腰を下ろす。女将はそれを待ってから、両手を上げて上体を起こす。
「こんなに出していただいて……穂花は幸せです……」
そう言うと、両手で自らの性器を開いて見せた。褐色の外陰部を染めるようにして牝華の内側から精液が溢れ出る。
（えっ！）
「おおっ！」
綾が息を呑むのと同時に、禿男も感嘆の声を上げる。二人の観客に見せつけるかの如く、もったりと流れた精液がぼたりぼたりと布団に滴った。
「あんた、大したもんだ……」
「恐れ入ります」
客の言葉に、女将は目を伏せる。彼女は裾を絡げたまま、枕元に置かれたティッシュを取る。布団の上で見上げる男の前で、自分の性器の汚れを拭っている。実に妖艶

なその仕草に、綾のみならず男も興奮を隠せない。
「あんたの様子を見ていたら、復活してしまったよ」
「あら、それはようございました」
（復活？）
綾には男の言葉の意味が分からなかったが、ろくな意味ではないように思えた。疑問を抱きつつ二人を窺う女学生の前で、薄毛男は女将の手を引くと布団に座らせた。
「次は上から責めてやるからな。一回出したから今度は長いぞ！」
頭頂部を輝かせながら、下卑た声と共に男が穂花を布団の上に組み敷く。着物の袷に突っ込んだ手で女将の乳房を弄り回す姿を見て、綾は彼らの会話の意味を悟る。
（またセックスするつもりなのね！）
肉欲に突き動かされているとしか思えない男の言動に嫌悪感が湧き起こる。同時に、男の肉欲を嬉々として受け入れているとしか思えない穂花に、寂しさのようなものを感じた。好奇心だけで二人の行為を盗み見ていた綾は、生々しい肉の交わりが急に汚らわしく思えてくる。
「ああっ、お客様！　素敵ですっ」

「この宿に来て本当によかった！　これからも贔屓（ひいき）にするぞ！」
「また抱いていただけるのですね！　またお客様の精液をいただけるのですねっ！」
二人の男女の荒い息が再び響く頃には、綾の姿は部屋の前から消えていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/